

第6章 幕藩体制の確立

1 織豊政権

●ヨーロッパ人の東アジア進出

日本の戦国時代に当たる15世紀後半から16世紀にかけて、ルネサンスと宗教改革を経て近代社会へ移行しつつあったヨーロッパ諸国は、イスラーム世界に対抗するために、キリスト教の布教、海外貿易の拡大などをめざして世界に進出した①。この結果、世界の諸地域がヨーロッパを中心に広く交流する**大航海時代**と呼ばれる時代に入った。

その先頭に立ったのが、イベリア半島の王国スペイン(イスパニア)とポルトガルであった。アメリカ大陸に植民地を広げたスペインは、16世紀半ばには太平洋を横断して東アジアに進出し、フィリピン諸島を占領してマニラを拠点とした。ポルトガルは、インド西海岸のゴアを根拠地にして東へ進出し、中国のマカオに拠点を築いた。

当時の東アジア地域では、なお**明**が**海禁政策**をとって私貿易を禁止していたが、環シナ海の中国・日本・朝鮮・琉球・アンナン(ベトナム)などの人びとが、国の枠をこえて広く中継貿易をおこなっていた。ヨーロッパ人は世界貿易の一環として、この中継貿易に参入してきたのである。

●南蛮貿易とキリスト教

1543(天文12)年にポルトガル人を乗せた中国人倭寇の船が、九州南方の**種子島**に漂着した②。これが日本にきた最初のヨーロッパ人である。島主の種子島時堯は、彼らのもっていた鉄砲を買い求め、家臣にその使用法と製造法を学ばせた。これ以後、ポルトガル人は毎年のように九州の諸港に来航し、日本との貿易をおこなった。またスペイン人も、1584(天正12)年肥前の平戸に来航し、日本との貿易を開始した。当時の日本では、ポルトガル人やスペイン人を南蛮人と呼んだので、この貿易を**南蛮貿易**という。

南蛮人は、中国の生糸や鉄砲・火薬などをもたらし、16世紀中頃から飛躍的に生産が増大した日本の**銀**などと交易した③。鉄砲は戦国大名のあいだに新鋭武器として急速に普及し、足軽鉄砲隊の登場は従来の騎馬戦を中心とする戦法をかえ、防御施設としての城の構造も変化させた。

南蛮貿易は、キリスト教宣教師の布教活動と一体化しておこなわれていた。1549(天文18)年、日本布教を志したイエズス会(耶蘇会)④の宣教師**フランシスコ=ザビエル**が鹿児島に到着し、大内義隆・大友義鎮(宗麟)らの大名の保護を受けて布教を開始した。

その後、宣教師はあいついで来日し、南蛮寺(教会堂)やコレジオ(宣教師の養成学校)・セミナリオ(神学校)などをつくって布教につとめた⑤。ポルトガル船は、布教を認めた大名領に入港したため、大名は貿易をのぞんで宣教師の布教活動を保護し、中には洗礼を受

ける大名もあった。彼らを**キリシタン大名**と呼ぶが、そのうち、大友義鎮・有馬晴信・大村純忠の3大名は、イエズス会宣教師ヴァリニャーニの勧めにより、1582(天正10)年、少年使節をローマ教皇のもとに派遣した(**天正遣欧使節**)⑥。

●織田信長の統一事業

戦国大名の中で全国統一の野望を最初にいだき、実行に移したのは尾張の**織田信長**であった。信長は1560(永禄3)年に今川義元を尾張の桶狭間の戦いで破り、1567(永禄10)年に美濃の斎藤氏を滅ぼして岐阜城に移ると、「天下布武」の印判を使用して天下を武力によって治める意志を明らかにした。翌年信長は、畿内を追われていた**足利義昭**を立てて入京し、義昭を将軍職につけて、全国統一の第一歩を踏み出した。

1570(元亀元)年、信長は姉川の戦いで近江の浅井氏と越前の朝倉氏を破り、翌年には比叡山延暦寺の焼打ちをおこなって、強大な宗教的権威を屈伏させた。1573(天正元)年には、将軍権力の回復をめざして信長に敵対した義昭を京都から追放して室町幕府を滅ぼし、1575(天正3)年の三河の**長篠合戦**では、鉄砲を大量に用いた戦法で、騎馬隊を中心とする強敵武田勝頼の軍に大勝し、翌年近江に壮大な**安土城**を築き始めた。

しかし、信長の最大の敵は石山(大坂)の本願寺を頂点にし、全国各地の浄土真宗寺院や寺内町を拠点にして信長の支配に反抗した一向一揆であった。信長は、1574(天正2)年に伊勢長島の一向一揆を滅ぼしたのに続いて、翌年には越前の一向一揆を平定し、1580(天正8)年、ついに石山本願寺を屈伏させた⑦。

信長は、家臣団の城下町への集住を徹底させるなどして、機動的で強大な軍事力をつくり上げ、すぐれた軍事的手腕でつぎつぎと戦国大名を倒しただけでなく、伝統的な政治や宗教の秩序・権威を克服することにも積極的であった。また経済面では、戦国大名がおこなっていた指出検地や関所の撤廃を征服地に広く実施したほか、自治的都市として繁栄を誇った堺を武力で屈伏させて直轄領とするなどして、畿内の高い経済力を自分のものとし、また安土城下町に**楽市令**を出して、商工業者に自由な営業活動を認めるなど、都市や商工業を重視する政策を強く打ち出していった。

このようにして信長は京都をおさえ、近畿・東海・北陸地方を支配下に入れて、統一事業を完成しつつあったが、独裁的な政治手法はさまざまな不満も生み、1582(天正10)年、毛利氏征討の途中、滞在した京都の本能寺で、配下の明智光秀に背かれて敗死した(**本能寺の変**)。

●豊臣秀吉の全国統一

信長のあとを継いで、全国統一を完成したのは**豊臣(羽柴)秀吉**である。尾張に生まれた秀吉は、信長に仕えてしだいに才能を発揮し、信長の有力家臣に出世した。秀吉は1582(天正10)年、山城の山崎の合戦で信長を倒した明智光秀を討ち、翌年には信長の重臣であった

柴田勝家を賤ヶ岳の戦いに破って、信長の後継者の地位を確立した。同年秀吉は、水陸交通にめぐまれた石山の本願寺の跡に壮大な**大坂城**を築き始め、1584(天正12)年には、尾張の小牧・長久手の戦いで織田信雄(信長の次男)・徳川家康軍と戦ったが、和睦に終わった。

これを機に秀吉は、軍事力だけでなく、伝統的権威も利用しながら全国統一をめざすようになった。秀吉は1585(天正13)年、朝廷から**関白**に任じられ、長宗我部元親をくわだして四国を平定すると、翌年には太政大臣に任じられ、**豊臣**の姓を与えられた。関白になった秀吉は、天皇から日本全国の支配権をゆだねられたと称して、全国の戦国大名に停戦を命じ、その領国の確定を秀吉の裁定に任せることを強制した⑧。そしてこれに違反したことを理由に、1587(天正15)年には九州の島津義久を征討して降伏させ、1590(天正18)年には小田原の北条氏政を滅ぼし(小田原攻め)、また伊達政宗ら東北地方の諸大名をも服属させて、全国統一を完成した。

1588(天正16)年には、京都に新築した**聚楽第**に後陽成天皇を迎えて歓待し、その機会に、諸大名に天皇と秀吉への忠誠を誓わせるなど、秀吉は天皇の権威をたくみに利用しながら新しい統一国家をつくり上げていった。

豊臣政権の経済的な基盤はばく大な**蔵入地**(直轄領)にあり、佐渡・石見大森・但馬生野などの主要な鉱山も直轄にして、天正大判などの貨幣を鑄造した。さらに京都・大坂・堺・伏見・長崎などの重要都市も直轄にして豪商を統制下におき、政治・軍事などにその経済力を活用した⑨。

しかし、豊臣政権も織田政権と同様、秀吉の独裁が著しく、中央政府の組織の整備が十分おこなわれなかった。腹心の家臣を五奉行として政務を分掌させ、有力大名を五大老として重要政務を合議させる制度⑩ができたのは、秀吉の晩年のことであった。

●検地と刀狩

豊臣政権が打ち出した中心政策は、**検地**と**刀狩**であった。秀吉は新しく獲得した領地につぎつぎと検地を施行したが、これら一連の検地を**太閤検地**という⑪。太閤検地は、土地の面積表示を新しい基準のもとに定めた町・段・畝・歩⑫に統一するとともに、それまでまちまちであった柵の容量も**京柵**に統一し、村ごとに田畑・屋敷地の面積・等級を調査してその**石高**(村高)を定めた⑬。この結果、全国の生産力が米の量で換算された石高制が確立した。また太閤検地は、荘園制のもとで一つの土地に何人もの権利が重なりあっていた状態を整理し、検地帳には実際に耕作している農民の田畑と屋敷地を登録した(**一地一作人**)。この結果、農民は自分の田畑の所有権を法的に認められることになったが、それと同時に、自分の持ち分の石高に応じた年貢などの負担を義務づけられることにもなった⑭。

秀吉は全国統一を終えた1591(天正19)年、天皇におさめるためと称して、全国の大名に対し、その領国の**検地帳**(御前帳)と**国絵図**の提出を命じた。これにより、すべての大名の

石高が正式に定まり、大名は支配する領国の石高にみあった軍役を奉仕する体制ができあがった。

刀狩は、農民から武器を没収して農民の身分を明確にする目的でおこなわれた。荘園制下の農民は刀などの武器をもつものが多く、土一揆や一向一揆などでは、これらの武器が威力を発揮した。そこで秀吉は一揆を防止し、農民を農業に専念させるため、1588(天正16)年**刀狩令**を出し、農民の武器を没収した^⑮。

ついで1591(天正19)年、秀吉は**人掃令**を出して、武家奉公人(兵)が町人・百姓になることや、百姓が商人・職人になることなどを禁じ、翌年には関白豊臣秀次が朝鮮出兵の人員確保のために前年の人掃令を再令し、武家奉公人・町人・百姓の職業別にそれぞれの戸数・人数を調査・確定する全国的な戸口調査をおこなった。その結果、諸身分が確定することになったので、人掃令のことを身分統制令ともいう。こうして、検地・刀狩・人掃令などの政策によって、兵・町人・百姓の職業にもとづく身分が定められ、いわゆる**兵農分離**が完成した。

●秀吉の対外政策と朝鮮侵略

秀吉は、初めキリスト教の布教を認めていたが、1587(天正15)年、九州平定におもむき、キリシタン大名の大村純忠が長崎をイエズス会の教会に寄付していることを知って、まず大名らのキリスト教入信を許可制にし、その直後**パテレン**(宣教師)**追放令**を出して宣教師の国外追放を命じた^⑯。だが秀吉は一方で、1588(天正16)年に**海賊取締令**を出して倭寇などの海賊行為を禁止し、海上支配を強化するとともに、京都・堺・長崎・博多の豪商らに南方との貿易を奨励したので、貿易活動と一体化して布教がおこなわれていたキリスト教の取締りは不徹底に終わった^⑰。

16世紀後半の東アジアの国際関係は、中国を中心とする伝統的な国際秩序が明の国力の衰退により変化しつつあった。全国を統一した秀吉は、この情勢の中で、日本を東アジアの中心とする新しい国際秩序をつくることを志し、ゴアのポルトガル政庁、マニラのスペイン政庁、高山国(台湾)などに服属と入貢を求めた。

1587(天正15)年、秀吉は対馬の宗氏を通して、朝鮮に対し入貢と明へ出兵するための先導を求めた。朝鮮がこれを拒否すると、秀吉は肥前の名護屋に本陣を築き、1592(文禄元年)、15万余りの大軍を朝鮮に派兵した(**文禄の役**)。釜山に上陸した日本軍は、鉄砲の威力などによってまもなく漢城(ソウル)・平壤(ピョンヤン)を占領したが、**李舜臣**の率いる朝鮮水軍の活躍や朝鮮義兵の抵抗、明の援軍などにより、しだいに戦局は不利になった。そのため現地の日本軍は休戦し、秀吉に明との講和を求めたが、秀吉が強硬な姿勢を続けたため交渉は決裂した^⑱。

1597(慶長2)年、秀吉はふたたび朝鮮に14万余りの兵を送ったが(**慶長の役**)、日本軍は

最初から苦戦を強いられ、翌年秀吉が病死すると撤兵した。前後7年におよぶ日本軍の**朝鮮侵略**は、朝鮮の人びとを戦火に巻き込み、多くの被害を与えた^⑩。また国内的には、ぼう大な戦費と兵力を無駄に費やす結果となり、豊臣政権を衰退させる原因となった。

【脚注】

① 1492年、イタリア人コロンブスはスペイン女王イサベルの援助によって大西洋を横断して西インド諸島に達し、1498年にはポルトガル人ヴァスコ=ダ=ガマがアフリカ大陸南端をまわってインド西海岸のカリカットに到着した。またポルトガル人マゼランは16世紀初め、スペインの船隊を率い、アメリカ大陸南端をまわって太平洋に出てフィリピン諸島に到着し、その一隊はさらに西進を続けて世界周航を成し遂げた。

② 1542(天文11)年とする説もある。

③ 平戸・長崎・豊後府内(大分市)などがおもな貿易港であり、京都・堺・博多などの商人も貿易に多く参加した。

④ 当時、ヨーロッパでは宗教改革によるプロテスタント(新教)の動きが活発であったが、カトリック(旧教)側も勢力の挽回をはかって、アジアでの布教に力を入れる修道会も多かった。その一つがイエズス会である。当時日本では、キリスト教をキリシタン(吉利支丹・切支丹)宗・天主教・耶蘇教などと呼んだ。

⑤ ザビエルのあと、ポルトガル人宣教師ガスパル=ヴィレラやルイス=フロイスらが布教につとめ、キリスト教は急速に広まった。信者の数は1582(天正10)年頃には、肥前・肥後・豊後などで11万5000人、豊後で1万人、畿内などで2万5000人に達したといわれる。

⑥ 伊東マンショ・千々石ミゲル・中浦ジュリアン・原マルチノの4少年が派遣され、ゴア・リスボンを経てローマに到着し、教皇グレゴリウス13世にあい、1590(天正18)年に帰国した。

⑦ 本願寺の顕如(光佐)は、1570(元亀元)年に諸国の門徒に信長と戦うことを呼びかけて挙兵し、11年におよぶ石山戦争を展開したが、この年ついに屈伏して、石山を退去した。

⑧ この政策を惣無事令と呼ぶこともある。

⑨ 秀吉は堺の千利休・小西隆佐(行長の父)、博多の島井宗室・神屋宗湛らの商人の力を利用した。

⑩ 五奉行は浅野長政・増田長盛・石田三成・前田玄以・長束正家。大老は初め徳川家康・前田利家・毛利輝元・小早川隆景・宇喜多秀家・上杉景勝で、小早川隆景の死後に五大老と呼ばれた。

⑪ 太閤とは、前に関白であった人の尊称である。

⑫ これ以前には6尺5寸(約197cm)四方を1歩とし、360歩を1段としたのに対し、太閤

検地では6尺3寸(約191cm)四方を1歩とし、300歩を1段とした。

⑬ その決定の方法は、田畑に上・中・下・下々などの等級をつけ、たとえば上田1段は1石5斗、中田は1石3斗というように、その生産力を米で表わした。この1段当たりの生産力を石盛または斗代といい、石盛に面積を乗じて得られた量を石高という。また太閤検地では、検地と並行して村の境界を画定する村切もおこなわれた。

⑭ 年貢の納入額は、領主に石高の3分の2を納入する二公一民が一般的であった。

⑮ これにより中世の惣村がもっていた武力は大きく削られたが、惣村で生み出された自治的な村の運営方式は太閤検地後も続き、年貢などを村高にもとづいて村の責任で一括納入する村請も、江戸時代の村へと受け継がれていった。

⑯ この時、キリスト教をすてなかった播磨国明石城主高山右近は、領地を取り上げられた。しかし一般人の信仰は、「その者の心次第」として禁じなかった。

⑰ 1596(慶長元)年、土佐に漂着したスペイン船サン=フェリペ号の乗組員が、スペインが領土拡張に宣教師を利用していると証言したことから(サン=フェリペ号事件)、秀吉は宣教師・信者26名を捕えて長崎で処刑した(26聖人殉教)。その背景には、日本への布教のため進出したスペイン系のフランシスコ会とイエズス会との対立があった。

⑱ 1593(文禄2)年から始まった和平交渉では、和平の実現を急ぐ現地の武将たちの判断で、明皇女と天皇の結婚、朝鮮王子の人質、朝鮮南部の割譲などを求めた秀吉の要求は明側に伝えられなかった。1596年の明使来日時にそのことを知った秀吉は激怒し、交渉は決裂した。

⑲ 両度の朝鮮侵略は、朝鮮では壬辰・丁酉倭乱と呼ばれた。

【史料】

樂市令

定 安土山下町中^①

一 当所中樂市として仰せ付けらるるの上は、諸座・諸役・諸公事等、ことごとく免許の事^②。

一 普請免除の事。

一 分國中徳政これを行うといえども、当所中免除の事^③。

(近江八幡市共有文書、原漢文)

①一五七七(天正五)年六月、織田信長が安土城下町に出した樂市令で、十三条よりなる。

②この城下町を樂市にすることにしたので、城下町は樂座(無座)で、住民のいっさいの税は免除となる。③徳政令が出されても、この城下町の町人の債権は破棄されない。

太閤検地

一 仰せ出され候趣、国人①并百姓共ニ合点②行候様ニ、能々申し聞すべく候。自然③、相届かざる④覚悟の輩之在るに於ては、城主にて候ハ、其もの城へ追入れ、各相談⑤じ、一人も残し置かず、なでぎり⑥ニ申し付くべく候。百姓以下ニ至るまで、相届かざるニ付てハ、一郷も二郷も悉くなでぎり仕るべく候。六十余州⑦堅く仰せ付けられ、出羽・奥州迄そさう⑧ニハさせらる間敷候。たとへ亡所⑨ニ成候ても苦しからず候間、其意を得べく候。山のおく、海ハろかいのつゝき候迄、念を入るべき事専一に候。……

(天正十八年)八月十二日 (秀吉朱印)

浅野弾正少弼とのへ

(浅野家文書)

①在地性の強い土着領主。②納得。③もしも。④納得しないこと。検地に反対することを指す。⑤検地担当の武将たちが連携して。⑥撫斬り。片端から切り捨てること。⑦日本全国のこと。全国に六十六カ国二島あった。⑧粗相。粗略の意。⑨耕作者のいない土地。

刀狩令

一 諸国百姓、刀、脇指①、弓、やり、てつはう、其外武具のたぐひ所持候事、堅く御停止候。其子細は、入らざる道具②をあひたくはへ、年貢・所当を難渋せしめ、自然③、一揆を企て、給人④にたいし非儀の動をなすやから、勿論御成敗あるべし。然れば其所の田畠不作せしめ、知行ついえ⑤になり候の間、其国主、給人、代官として、右武具、悉取りあつめ、進上致すべき事。

一 右取をかるべき刀、脇指、ついえにさせらるべき儀にあらざ候の間、今度大仏⑥御建立の釘、かすかひに仰せ付けらるべし。然れば、今生⑦の儀は申すに及ばず、来世までも百姓たすかる儀に候事。

一 百姓は農具さへもち、耕作専に仕り候へハ⑧、子々孫々まで長久に候。百姓御あはれミをもって、此の如く仰せ出され候。誠に国土安全万民快樂の基也。右道具急度取り集め、進上有るべく候也。

天正十六年七月八日 (秀吉朱印)

(小早川家文書)

①短い刀のこと。②農耕に不要な武器。③もしも。④大名から土地を給与されている家臣。⑤むだ。⑥秀吉が建立させていた京都方広寺の大仏。⑦現世。⑧耕作に専念すること。

バテレン①追放令②

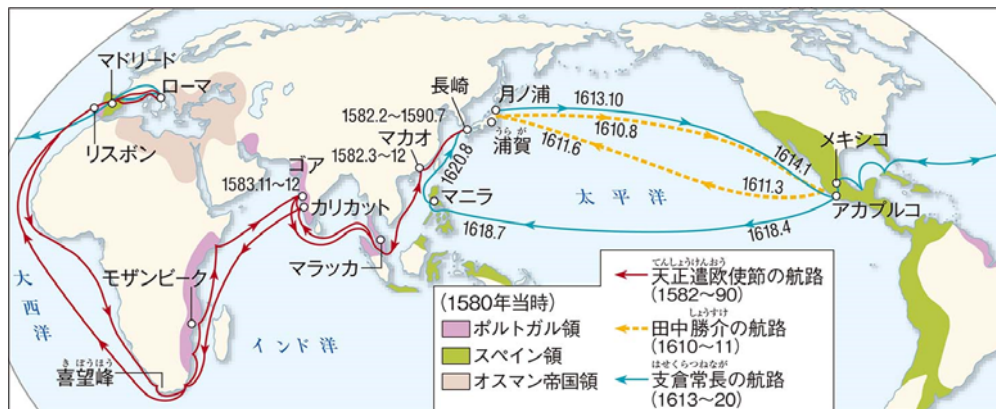
一 日本ハ神国たる処、きりしたん国より邪法を授け候儀、太以て然るべからず候事。
 一 其国郡の者を近付け門徒になし、神社仏閣を打破るの由、前代未聞に候。……
 一 伴天連、其知恵の法を以て、心ざし次第に檀那③を持ち候と思召され候へハ、右の如く日域④の仏法を相破る事曲事に候条、伴天連の儀、日本の地ニハおかせられ間敷候間、今日より廿日の間ニ用意仕り帰国すべく候。……

一 黒船⑤の儀ハ商売の事に候間、各別に候の条、年月を経、諸事売買いたすべき事。

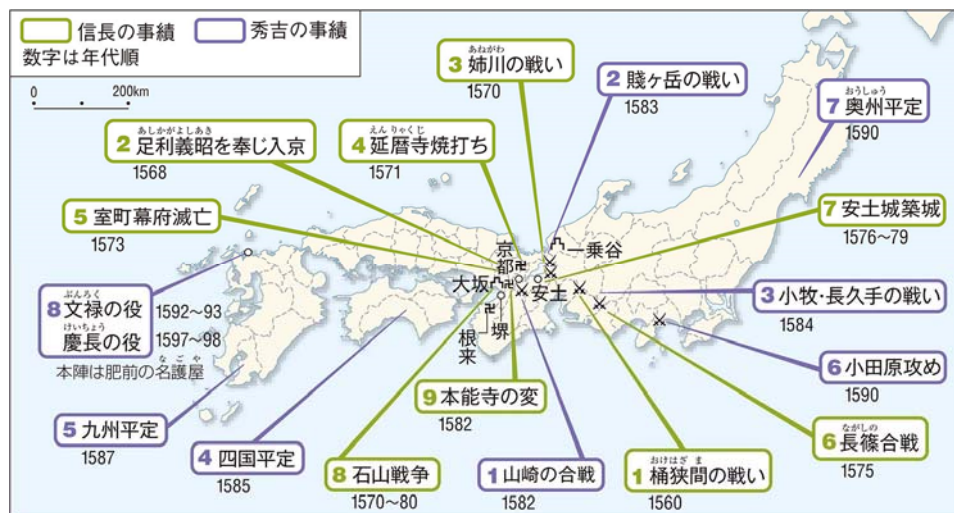
天正十五年六月十九日（松浦文書）

①バテレンはポルトガル語のパードレ(神父)の音訳で、外国人宣教師のこと。②豊臣秀吉が出した追放令の写しで五条よりなる。③信者。④日本。⑤ポルトガル・スペイン船。

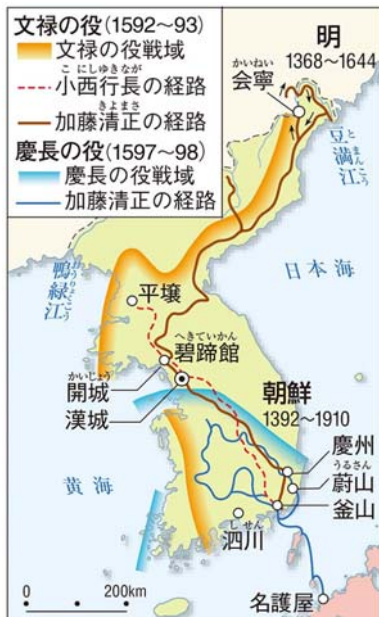
【地図・図版】



16世紀末の世界と日本人の往来



信長・秀吉の事績



文禄・慶長の役要図

【コラム】

鉄砲

戦国時代は技術革新の時代であった。その生産技術を代表するのが鉄砲の大量生産である。鉄砲は、伝えられるとすぐ、和泉の堺、紀伊の根来・雑賀、近江の国友などで大量生産された。わずか7年後には畿内で鉄砲を使用した戦闘がおこなわれ、十数年後には、全国的に大量の鉄砲が普及していた。

この大量生産を可能にしたのは、当時の製鉄技術や鍛造・鋳造技術の水準の高さであった。さらに鉄砲に必要な火薬製造の技術は、のちに平和な時代になると花火をつくり出した。

石見銀山

島根県大田市にある石見銀山遺跡が2007年にユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録された。石見銀山は大森銀山ともいい、かつては世界有数の銀山として海外にもその名が知られていた。石見銀山繁栄のきっかけは、16世紀前半に博多商人神屋(谷)寿禎が朝鮮から「灰吹法」という精錬技術を伝えたことにあった。これにより16世紀後半から17世紀初頭にかけて石見銀山は最盛期を迎え、その銀を求めて多くの南蛮人が日本に来航した。とくにポルトガル人は、南米ポトシ銀山の銀を背景に東アジア貿易に乗り出してきたスペイン人に対抗するためにも、日本の銀を必要とした。

「灰吹法」はやがて日本各地の銀山に広がり、その結果、17世紀初頭の日本の産銀量は世界の総産銀量の3分の1に当たる年間約200トンにもものぼったというが、その後はしだいに減少し、石見銀山も17世紀中頃に銀山としての使命を終えることになった。